

(3) 歴史に学ぶ

戦争廃絶を願う

(在外父兄救出学生同盟との出会い)

東京都西東京市 竹田 純人

私は満洲育ちで、物心が付いた頃に満洲事変が勃発し、満洲国は関東軍高級参謀らによって支配されて、強力な戦時態勢に追いこまれていった。その後、満洲国建国、支那事変、泥沼の日中戦争、大東亜戦争、敗戦と、私の学生時代は戦争と共に生きてきたようなものであった。大正末期に生を受け、昭和で苛酷な戦争を体験し、平成の今は自由を謳歌している。戦場への参加、空襲の実体験、引き揚げの苦難等に遭遇したことはなかったが、いつも紙一重の中を生きてきたと思われる。中学時代をふりかえると、私は性格的に軍国主義が嫌いで、胸奥に反骨心が存在していた。敗戦色濃厚な日本帝国の時代と我々の年代が重なったので、多くの先輩、

学友が戦地に赴き、忠孝一致の思想の下に、辛酸をなめ尽くして散っていった。それらの惨たらしい現実を見聞きすることにより、その悲惨さを思い、戦争は絶対反対の立場を心の中に抱いていたことは事実である。思えば、私は軍国主義全盛の中に放り出されながら、待ちうける死の方向から救われた者として、何か運命的なものを感じている。

戦争から生ずる実体験としては、家族・親族の悲惨な引き揚げと、自身については両親との音信不通、送金の杜絶、食料の極端な不足等があり、戦争という現実に向き直して、私なりに筆舌に尽くし難い、物心両面の打撃は被った。しかし本当に犠牲になった方々の更なる悲劇は、私などとは比較にならないものがあつたと思う。

終戦後まもなく、外地に父兄を有する学生の集団として「在外父兄救出学生同盟」が各地に結成された。私は当時京都地区にいたが、戦後の困難な時代に立ち向かい、共通の精神を持つ者として、外地からの引き揚げ者の医療、情報伝達を含む実践的援助を目的とする活動に

参加した。思い出される実践活動の例としては、博多港引き揚げ者援護の際、鮮満国境や三十八度線を越えて祖国に上陸した引き揚げ者集団と接し、その精神的肉体的ご苦労を思い、心から涙した。また、舞鶴経由京都駅着のコロ島よりの引き揚げ者の中では、多くの重病人、特に栄養失調症の患者をお世話して、改めて戦争から生ずる数多くの悲劇なるものを感じた次第である。

社会人となり、広島、長崎の原爆跡をしばしば訪れる機会があり、ここでは戦争が招いた終末的な光景に言葉を失うのだった。ここは日本が被った、負の遺産の原点として、観光展示的にならないように、ありのままの姿として後世に残して貰いたいものである。

戦後六十有余年を経た今日、悲惨な戦争を推進指導した戦争責任者達はほとんどこの世から去り、犠牲を蒙った人達の時代になってきているが、この体験をした人達もそろそろ終焉を迎える齢に近づきつつある。声を大にして「戦争はいけない。平和を守ろう」と叫びたい。

日露戦争の結果で満洲の権益を得、大東亜戦争で全てを失った日本だが、我々はその歴史をよく繙いて研究反省し、後世に更なる禍根を残さぬ平和国家を樹立しなければならぬ。戦争が再び起きない世の中にするこ

そ、戦争体験者の責務であると考えるものである。

世界的にみれば、宗教的対立にある国家間の紛争はなかなか避けられないかも知れないが、戦争回避の打開策として、英知をもって各国家間の外交交渉を進めることにより、平和維持を進めて貰いたいと希う。

八十路を越えて、余生も見えてきた昨今、多くの歪みを生じてきた世界の中の日本国が、この先どうなつてゆくのか、強い関心を持つものである。

